

春から初夏の野山でヒメハナバチを探して

わたなべ きょうへい
渡辺 恭平(学芸員)

皆さんはヒメハナバチというハチを知っていますか？ 私が専門とする寄生蜂の「ヒメバチ」と名前が似ていますが別のハチで、ミツバチやクマバチと同じ花蜂の仲間です(図1)。私は最近、神奈川県のレッドデータブック作成に関連して、苦手であったハナバチ類の勉強をしているのですが、その面白さの虜となってしまいました。今回は春に実施したヒメハナバチの調査について、紹介したいと思います。

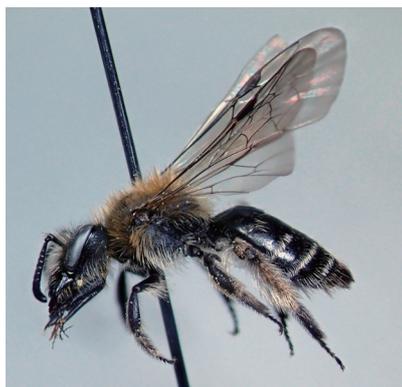


図1. 春の代表的なヒメハナバチ, ヤヨイヒメハナバチ (メス, KPM-NK 55280).

ヒメハナバチとは

ヒメハナバチの仲間は日本に85種ほどおり、その多くが春にだけ出現します。体はミツバチよりもわずかに小さい種が多く、5mmから15mmの間くらいで、ふさふさとした毛をもち、中にはぬいぐるみのような見かけをした種もいます。成虫は花の蜜を吸うとともに、幼虫の餌となる花粉をせっせと集めます。胸部(厳密には中体節)の側面後方寄りに花粉を貯める毛の「かご」があり、後脚にある刷毛を使って上手に花粉を貯め込みます。花蜂の中では種ごとに好みの花が限定され、特定の花にしか来ない種類もあります。巣は地中に作り、時に1か所に多数の巣が造られますが、ミツバチと異なり家族で暮らしません。

春の野山を歩く

私自身は、ヒメハナバチの仲間の同定(種名を調べること)はどちらかといえば苦手でした。わかりやすい資料がないことが理由です。昨年度、コロナ禍による自粛で生じた時間を有効活用してハナバチ類の同定のためにノートを作成し、ある程度は



図2. 春先の三国峠(明神山方面を望む).

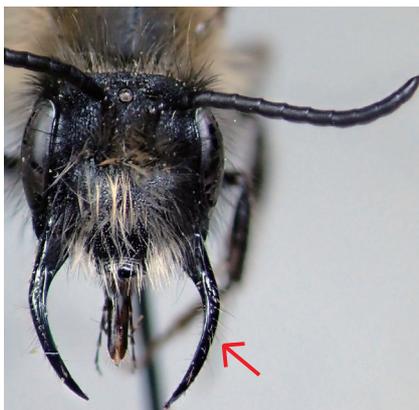


図3. ミカドヒメハナバチ (オス, KPM-NK 55281) の顔。オスには立派な大あご(矢印)がある。



図4. ナワヒメハナバチ (メス, KPM-NK 55282)

種名が分かるようになったので、2021年の春から本格的に調査を行うことにしました。ヒメハナバチは早い種では2月下旬くらいから野外で見られます。まだ他の虫が出ていない時期に野山を歩くと、寒い中花に来ているヒメハナバチに出会えます。先述の通り、ヒメハナバチは花に好みがあります。あいく私は花の種類に詳しいわけではなく、片っ端から花を見て歩き、ヒメハナバチが来ていた植物の種名を覚えながらの調査となりました。

低地の調査で一気に種数が増え出すのは、アブラナ(菜の花)が咲き出すころです。アブラナは幼少時の記憶では多くの虫が来る印象でしたが、たいていは待っていても少数のハチが来るだけで、

次々と虫が来るようなアブラナは稀まれでした。年配の蜂愛好家と話をしても、昔はアブラナにハナバチが湧くように来ていたという話を聞きますので、農薬の影響があるかもしれない。この時期はユキヤナギ、ヤナギ類、タンポポ、サクラの花などで多くのハチに出会うことができました。

特に楽しかった調査は、山梨県境に近い三国峠周辺での調査でした。まだ冬の気配が残る一面枯草色の山(図2)を見て、本当にハチ(というか虫)がいるのかという気持ちで歩きました。わずかにマメザクラやクサボケの花があるものの、寒いということもあり、虫の姿はありません。ところが、昼になるにつれて気温が上がると、どこからともなくヒメハナバチが現れ、これらの花

に飛んできます。正午過ぎになるとその勢いはどんどん増し、条件の良いマメザクラの花には次々とハチが飛来し、落ちていて昼飯も食べられない状況でした。いずれの花にもワタセヒメハナバチが多数来ており、それに混ざり大型でカッコ良いミカドヒメハナバチ(図3)や、美しいナワヒメハナバチ(図4)、県下では記録が少ないヤマブキヒメハナバチなども得られ、大収穫の1日でした。普通の昆虫愛好家がなかなか行かない早春の山が、実はとても楽しい場所であることを知りました。

ヤナギの花に来るハチを探して

ヒメハナバチの中には、ヤナギの花を好んで利用する種が結構います。ヤナギが生える河川敷には砂地もあり、そのような場所を営巣地として上手に利用しています。博物館にはヤナギに関連する種の標本が特に乏^{とぼ}しかったこともあり、春先に酒匂川^{さかわがわ}の河川敷を中心に、ハチの探索を行いました。平野部から山間部まで、数年前にヤナギを見ていたところを中心に、高まる期待とともに川に出かけましたが、台風による氾濫や河川改修等により、ヤナギ類の姿はほとんどありませんでした。運よくヤナギがあっても、ひよろひよろの幼木で、周囲の砂地が泥で覆われ営巣適地が少ないためか、狙いのハチは一種

も見つかりませんでした。多摩川や相模川には多少ともヤナギがあるようですので、コロナ禍が収まったら、これらの川でベジジをしたいと思えます。

強力な武器、偏光サングラス^{へんこう}

今回の調査では、思わぬものが大活躍しました。それは偏光サングラスです。これはもともと用水路の中の魚を探したり、車の運転で使っていたものですが、これをつけてハチを見ると、3~4mほど離れたところのハチが、逆光下でも驚くほど良く見えます。花蜂の多くは俊敏に飛ぶため、木々をバックに飛ばされると見失いますが、これがあれば正確に目で追えます(図5)。初夏になり、木々が茂ってくるとコデマリ、ガマズミ、クリ、ウツギ類、ウメドキなど、木本の花に多くのヒメハナバチが来ますが、この調査が劇的に容易になりました。例えば、湯河原町での調査では、マユミの花にくるヒメハナバチが偏光サングラスにより驚くほどよく見え、花についた状態で種類のあたりをつけて採集することができ、花をあまり散らさずにハチの調査ができました。このようなことで、今ではすっかり必須の調査道具となってしまいました。唯一の欠点は怪しさが(さらに)増えてしまうことで、登山者などからの声かけが激減してしまいました。

花に来ないオス

偏光サングラスを活用した樹上の探索により、梢^{こずえ}に集まるヒメハナバチのオスがとて目につくようになりました。日当たりの良い突き出た葉先など、条件が良いと次々にオスが飛来し、稀にメスが採れることから交尾が目的と考えられます。花が無いところでも花蜂が採れることは目から鱗^{うろこ}で、ホオナガヒメハナバチ、コガタホオナガヒメハナバチ(図6)、ワタセヒメハナバチ、ムネアカハラビロヒメハナバチなどが、この方法で多数の個体を採集することができました。また、副産物?で得られたヒメハチにも珍しい種が多かったことから、樹上のハチ探しには魅力が詰まっているといえるでしょう。



図6. コガタホオナガヒメハナバチ(オス, KPM-NK 55283). ウグイスカグラに好んで来るので、ウグイスカグラヒメハナバチという別名がある。

ヒメハナバチの現状

近年、ミツバチが姿を消したというニュースを聞いた人は多いと思います。ミツバチに限らず、花蜂の仲間は全世界で減少しており、ヨーロッパなどで論文も出ています。この原因としては、ネオニコチノイド系農薬のような浸透性農薬が有力視されています。ミツバチは花蜂の中では比較的環境悪化に強いハチであり、他の花蜂たちも危機的な状況にあるのではないかと考えています。今回の調査では、ヒメハナバチに限らず花蜂の網羅的な収集を行っています。農薬、ニホンジカによる食害、開発による営巣地の消失など、花蜂を取り巻く状況は決して良くはありません。まずは資料を集め、県内での分布状況について詳細な現状把握が必要です。

ヒメハナバチの一部の種には夏から秋にも成虫が出現したり、少数の種では夏から秋だけに出現する種もあります。今年の後半も、ヒメハナバチを探して引き続き調査を行う予定です。



図5. 樹上に来るハチの採集。偏光サングラスを通して木々を見ることで、ハチを効率的に見つけられる。